

氏名(本籍)	せき ね ひろ こ 関 根 浩 子 (埼玉県)		
学位の種類	博 士 (芸術学)		
学位記番号	博 甲 第 3489 号		
学位授与年月日	平成 16 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	芸術学研究科		
学位論文題目	イタリアのサクロ・モンテ研究 - 西欧におけるエルサレム模造の形態の変遷からみたその起源についての考察 -		
主査	筑波大学教授	Dr. Phil.	中山 典 夫
副査	筑波大学教授	Dr. Phil.	和田 廣
副査	筑波大学教授	博士 (芸術学)	五十殿 利 治
副査	筑波大学助教授	博士 (芸術学)	齊 藤 泰 嘉

論 文 の 内 容 の 要 旨

(構成)

本論文は次の構成をもつ。

序

- 1 章 ‘サクロ・モンテ’の定義と研究略史
- 2 章 15 世紀以前の西欧における‘エルサレム’の模造建築
- 3 章 ミラノ管区ヴァラッロのサクロ・モンテ - フラ・ベルナルディーノ・カイーミの‘エルサレム’ -
- 4 章 トスカーナ管区サン・ヴィヴァルドのサクロ・モンテ - フラ・トマーゾ・ダ・フィレンツェの‘エルサレム’ -
- 5 章 形態の変遷から見たその後のイタリアにおけるサクロ・モンテとその他の複合的巡礼施設の展開

結語

これに、各章末の註と巻末の表および合計 255 点の図が加わる。

(概要)

序において本論文の目的が説明される。つづく 1 章では、まずこれまでのさまざまなキリスト教史または美術史の文献にみられる「サクロ・モンテ」の概念が再検討され、アルプス以北とイタリアの研究者の間に捉え方の相違のあることが明らかにされる。そして著者によって、「サクロ・モンテ」を狭義の「聖山」だけでなく、アルプス以北に多く見られる「カルヴァリオ (ヘブライ語でゴルゴダ) 山」、さらには遅れて登場する「十字架の道」をも含む「イタリアにおける近世カトリックの複合的巡礼施設」と定義することが提案される。

次いで、緻密に蒐集された資料に基づくヨーロッパ、とくにイタリアにおける研究史が概説され、そしてそれらを踏まえて、著者の方法論が明確な輪郭をもって示される。また、我が国における研究の現状についても触れられる。

「サクロ・モンテ」は中世末期の西欧に突然現われたのではなく、それには長い醸成期間があったとする

著者は、2章においてその前史を考察する。

2章は、次の2節に分けられる。

- 1) 14世紀以前の西欧における「エルサレム」の模造建築
- 2) 15世紀の西欧における「エルサレム」の模造建築

はるか遠く、異教徒の手の中にある聖地エルサレム（「真のエルサレム」）に対する西欧キリスト教徒の憧憬は、古代末期以来ヨーロッパの各地に「代用のエルサレム」を夢に見、それをそこに「真のエルサレム」の聖墳墓（キリストの墓）の小礼拝堂や主の復活の記念聖堂（アナスタシス）の模造建築を築くことで「代用のエルサレム」を実現させてきた。そこで1)節では、まず模造の原体とされた「真のエルサレム」の聖墳墓および復活記念聖堂の古代以来の形の変遷が考察される。次いで、それに応じての西欧の模造建築の遺例が時代を追って地域ごとに検証され、それぞれの時代によってその意味や概念を変えた特徴が考察される。11、12世紀に隆盛した西欧における「代用のエルサレム」の実現は、13、14世紀に下火になるも、15世紀にふたたび流行する。2)節では、この15世紀の西欧における「代用のエルサレム」の模造建築の実態が検証される。そしてこの世紀には、それら模造建築が、旧来通り単体で「真のエルサレム」を象徴するだけでなく、単体でなく幾つかの建造物を複合して「真のエルサレム」を代用させる例が、西欧の各地に登場したことが確認される。さらにこの時代には、当時の神学、文学、演劇、美術が示すように、キリストの受難に対する熱烈な信仰がおこり、それに呼応してとくにアルプス以北に、「十字架の道行き」の際のキリストの「苦しみの休止」を記念する複数の礼拝所、すなわち「留」（スタチオ）をもつ「代用のエルサレム」が出現したことも確認された。これらの「留」は、当初は十字架あるいは聖像を備えた柱によって示されたが、やがて受難の様子を描く素朴な絵あるいはレリーフを備えた礼拝堂が現われた。

以上の前史を踏まえて、次章からイタリアにおける「サクロ・モンテ」の起源とその後の発展が考察される。

3章では、ピエモンテ州ヴァラッロのサクロ・モンテが取り上げられる。このイタリア最古の「近世カトリックの複合的巡礼施設」は、パレスティナ巡礼の経験を有すフランシスコ会厳修派の神父ベルナルディーノ・カイーミによって15世紀末に建設された。しかし当初の施設は、カイーミ没後まもなく美術家ガウデンツィオ・フェッラーリ（1475～1574年）らによって、当初の構想にはなかった幾つかの礼拝堂や「ミステリ」（神秘、玄義）の表現が加えられた。その後も建築家ガレアツォ・アレッシによる再整備（1565～1569年）や、ミラノの大司教聖カルロ・ボッロメオによる改革（1570年頃～1585年）、さらにはノヴァーラの司教カルロ・バスカペ（1550～1615年）の大幅な再整備（1593～1640年頃）を経て、その外観はもはやカイーミの当初の構想を知ることができないまでに変えられている。したがって本章での最大の課題は、今日なお現地に確認できる遺構の調査と文献資料による、創設者カイーミが構想した「代用のエルサレム」の復元である。

最初の作業は、1514年に出版された当サクロ・モンテのもっとも古い巡礼案内書の記述を精読し、そこに言及されている建物の種類と目的、山上での位置の検証である。そしてその結果から、ヴァラッロの草創期のサクロ・モンテが、従来のヨーロッパにおける「代用のエルサレム」の伝統を受け継いで、個々の建造物が独立して「真のエルサレム」を象徴していたこと、そして、カイーミ没後に加えられたと思われる「苦しみの道」（ヴィア・ドロローサ）もまた、15世紀西欧におけるもうひとつの「代用のエルサレム」の型、すなわち「留」をもつそれと関係していたことが明らかにされる。

4章は、アルプスから遠く離れたトスカナ州に唯一築かれたサン・ヴィヴァルドのサクロ・モンテを扱う。ヴァラッロよりわずかに遅れて16世紀の初頭に、同じくフランシスコ会厳修派の修道士トマーゾ・ダ・フィレンツェによって建設されたこの複合的巡礼施設では、ヴァラッロではほとんど失われている創設当初の建造物が比較的良好に今日に伝えられている。とはいえ、ここにおいてもヴァラッロと同様、のちに草創期の構想にはなかった建物が付加されたり、またすでにあった礼拝堂の献堂名が変えられたりしており、明らかに複数の構想の重層化が認められる。それゆえ本章にあっても、文献資料の再吟味と現地踏査による当初

の構想の精確な復元が第一義の作業とされた。その結果当初の施設が、マムルーク朝時代の「真のエルサレム」全体とその周辺の土地を、地形的、舞台装置的に忠実に再現しようとしたものであったことが確認された。すなわち、当初に構想されたサン・ヴィヴァルドのサクロ・モンテは、15世紀に登場したもうひとつの「代用のエルサレム」の型、複数の「留」を有機的に結びつけた建築複合体から成る最初の壮麗な「近世カトリックの複合的巡礼施設」であったことが明らかにされた。

ヴァラッロとサン・ヴィヴァルドにサクロ・モンテが築かれた後、荒れ狂った宗教改革の嵐がおさまるまでの約半世紀の間、イタリアにおいても、両者に類する大規模な宗教施設の建造はなかった。サクロ・モンテがイタリアに新たに登場するのは、トレント公会議（1545～1564年）後、対抗宗教改革が熱を帯びる16世紀も末になってからである。

5章では、対抗宗教改革後に、あたかもプロテスタントに対する公会議派の要塞のごとく、アルプス南麓に陸続として築かれたサクロ・モンテについて、その形態の変遷が考察される。

しかし新たに登場したサクロ・モンテはもはや、はるか遠くの手の届かない「真のエルサレム」を夢見る「代用のエルサレム」ではなかった。その多くは、カルロ・ボッロメオやカルロ・バスカペによってすっかり姿を変えられたヴァラッロの施設を直接の手本とし、「留」をただ出来事の時間にしたがって配置するものとなった。また他のものは、「留」の主題をキリストの生涯や受難、それに関係する聖母の苦悩や悲しみから、第二のキリストたる聖フランチェスコや聖カルロなどの生涯や奇跡に拡大した。そしてその場合でも、それら「ミステリ」（神秘、玄義）の場面は、それが行なわれた時間にしたがって並べられた。またキリストや聖母マリア、聖人の生涯の他に、「ロザリオの玄義」さらには「十字架の道」が主題として取り入れられた。こうした主題の多様化に伴って、サクロ・モンテ自体の形態にも、初期の「代用のエルサレム」とは明らかに異なる新しい型が登場する。すなわち新しい主題は、公認された「ロザリオ」の祈りの実践や、「十字架の道」（ヴィア・クルーチス）の業行と密接に関係していたゆえに「留」の数は必然的に定められ、一定の数の「留」が一定の間隔をもって山上や斜面上に配置された。ヴァレーゼに建設された華麗な「ロザリオのサクロ・モンテ」はその典型であり、その後建設されるサクロ・モンテの手本となった。しかしたとえその建設時に手本があったとしても、イタリアのサクロ・モンテ群は今日まで、それぞれの豊かな個性に彩られて展開し、生きつづけている。この章では23の「サクロ・モンテ」が、南チロルの9の「カルヴァリオ山」を加えて、その主題と形態にしたがって分類されている。

最後に全体の内容を簡潔にまとめて結語とする。

審 査 の 結 果 の 要 旨

北イタリアのアルプス南麓各地に、中世末以来カトリック教徒の身近な信仰の拠りどころとして築かれ、「サクロ・モンテ（聖山）」と通称されてきた壮大な宗教施設がある。この「サクロ・モンテ（聖山）」の起源をヨーロッパにおける「エルサレム模造」の変遷から考察しようとしたのが本論文である。

1章において著者はまず、「サクロ・モンテ」を狭義の「聖山」だけでなく、アルプス以北に多く見られる「カルヴァリオ（ヘブライ語でゴルゴダ）」、さらには遅れて登場する「十字架の道」の伝統をも取り入れた「イタリアにおける近世カトリックの複合的巡礼施設」と定義することを提案する。つづいて著者は、この「サクロ・モンテ」が中世末期に突然現われたのではなく、その起源は、長い中世の間にはるか遠く、異教徒の手の中にある聖地エルサレム、すなわち「真のエルサレム」に対する西欧キリスト教徒の憧憬がヨーロッパにつくりだした「代用のエルサレム」に求められるのではないかと考える。この問題提起は、これまでの「サクロ・モンテ」研究に新しい道を拓くものであり、高く評価される。

上の問題提起にしたがって2章においては「サクロ・モンテ」の前史が考察されるのであるが、ここでの

著者の功績は次の4点に整理することができる。

- 1) 西欧における「代用のエルサレム」(著者のいう「模造エルサレム」)の模造の手本とされた「真のエルサレム」の実態を多くの資料に基づいて古代末期から15世紀まで追跡した。
- 2) 14世紀以前の西欧における「代用のエルサレム」は「真のエルサレム」の聖墳墓(キリストの墓)小礼拝堂およびそれを覆う復活記念聖堂(アナスタシス)の模造建築で象徴されていたことを明らかにした。
- 3) 15世紀には、それら模造建築が単体で「真のエルサレム」を象徴するだけでなく、幾つかの建造物を複合して「真のエルサレム」を代用させる例が、西欧の各地に現われたことを確認した。
- 4) また15世紀には、とくにアルプス以北において、「十字架の道行き」のキリストの「苦しみの休止」を記念する複数のとくべつな地点、すなわち「留」(スタチオ)をもつ「代用のエルサレム」が出現したことを確認した。

3章ではイタリア最古の「近世カトリックの複合的巡礼施設」、ピエモンテ州ヴァラッロのサクロ・モンテについて論じられるが、この章での著者のもっとも重要な課題は、15世紀末に神父ベルナルディーノ・カイミによって建設され、後の改築によってまったく様子を変えたこの「サクロ・モンテ」の本来の姿を復元することであった。古資料の渉獵と遺構の精査でこの困難な作業をなした著者は、当地のサクロ・モンテが、個々の建造物が独立して「真のエルサレム」を象徴する中世西欧の「代用のエルサレム」の伝統を受け継ぐ構想で築かれたこと、そしてカイミ没後まもなくして「苦しみの道」(ヴィア・ドロローサ)が加えられたが、この施設もまた、15世紀西欧におけるもうひとつの「代用のエルサレム」の型、すなわち「留」をもつそれと関係していたことを明らかにした。これは、「サクロ・モンテ」研究における重要な発見である。

16世紀の初頭、トスカナ州に築かれたサン・ヴィヴァルドのサクロ・モンテを論じた4章においても著者の最大の課題は、文献資料の吟味と現地踏査による草創期の構想の精確な復元であった。ここで特筆すべきは、著者によるフィレンツェ古文書館に眠っていた未発表の古記録の発見である。その解読によって当初の施設が、マムルーク朝時代の「真のエルサレム」全体とその周辺の土地を地形的に忠実に再現しようとしたものであったことが明らかにされた。

5章で著者は、宗教改革の嵐がおさまった後に陸続としてアルプス南麓に、あたかも北のプロテスタントに対峙するカトリックの要塞のごとく築かれた聖山群について、その形態の変遷を考察した。そして新たに登場したサクロ・モンテはもはや、「真のエルサレム」を夢見る「代用のエルサレム」ではなかったこと、多くはキリストの歩みの跡にしたがって「留」を配置するものとなったこと、またあるものでは、「留」の主題がキリストや聖母の苦悩や悲しみから第二のキリストたる聖フランチェスコや聖カルロなどの生涯や奇跡に拡大されたことが確認された。そして形態においても、初期の「代用のエルサレム」とは異なるタイプが登場したこと、すなわち新しい主題が「ロザリオ」の祈りや「十字架の道」(ヴィア・クルーチス)の業行と密接に関係していたゆえに、一定の数の「留」が一定の間隔をもって山上や斜面上に配置されたことなどが確認された。

以上見てきたように、本論文は、数回におよぶ現地の踏査と、すでに紹介された文献のみならず現地の古文書館等に隠れていた古い記録をも解読してなされた大部の労作である。壮大なテーマを微に入り細にわたって検証する記述は、ときにはぎこちなく、迷路にまよい込んだかの印象を与える。しかし読みすすんで俯瞰すれば、そこには一貫した強靱な推論のあったことが知られる。このようにして得られた成果は、これからのヨーロッパにおけるサクロ・モンテ研究に新鮮な風を吹き込むにちがいない。また、この研究が我が国でなされた意義も小さくない。わたしたちはここに、ヨーロッパにおけるカトリック信仰の生き生きとした現実を知り、また美術史に限っても、キリスト教美術における受難表現の意味の大きさを知らされるからである。

よって、著者は博士(芸術学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。